椰子の実

島崎藤村

(一)
名も知らぬ遠き島より流れ寄る椰子の実一つ
故郷の岸を離れて汝はそも波に幾月

(二)
旧の樹は生いや茂れる枝はなお影をやなせる
われもまた渚を枕ひとりみの浮寝の旅ぞ

(三)
実をとりて胸にあつれば新たなり流離の憂
海の日の沈むを見ればたぎり落つ異郷の涙
思いやる八重の潮々いづれの日にか国に帰らん
いづれの日にか国に帰らん

【作者】島崎藤村（一八七二～一九四三年）明治-昭和時代前期の詩人、小説家。
明治五年二月十七日生まれ。島崎正樹の四男。東北学院、小諸義塾などの教師をつとめる。明治二十六年北村透谷らの「文学界」創刊に参加。三十年「若菜集」で新体詩人として出発し、ついで「一葉舟(ひとはぶね)」「落梅集」を刊行。三十九年「破戒」で自然主義文学の代表的作家となり、「新生」「夜明け前」などを発表した。昭和十八年八月二十二日死去。七十二歳。長野県出身。明治学院卒。本名は春樹。【格言など】遂に、新しき詩歌の時は来りぬ(「藤村詩集」)

【備考】「椰子の実」この詩は一八九八(明治三十一年)の夏、1ヶ月半ほど伊良湖岬に滞在した柳田國男が浜に流れ着いた椰子の実の話を藤村に語り、藤村がその話を元に創作したものである